

Member

Associate Professor 伊藤香織  
Assistant Professor 丹羽由佳理

M 2	M 1	B 4
片田江由佳	石黒泰司	池田俊介
兼森毅	石橋理志	上原慧史
佐藤美緒	伊藤慎吾	大木美穂
関口由佳	大久保遼一	邱智エン
瀬長佑介	小野田龍	佐藤祐理
田中理恵	鎌田健太郎	芹沢暁
早川雄大	川上那華	田中瑠璃
宮崎高明	古川正敏	富永貴之
吉本浩卓		永井智裕
		西村尚宏
		萩原豪
		福原香菜子
		星洗祐
		堀口裕
		山本浩平
		山本桃子
		吉村元宏

fab C. vol.6  
2012年1月1日 発行

□編集  
上原慧史 邱智エン  
富永貴之 永井智裕

□発行  
伊藤香織都市計画研究室  
東京理科大学理工学部建築学科  
〒278-8510  
千葉県野田市山崎2641  
TEL 04-7123-4785 (研究室直通)  
URL [www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/](http://www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/)

□印刷・製本  
祥美印刷株式会社

fab C. は、伊藤香織研究室(東京理科大学理工学部建築学科)が発行するフリーペーパーです。研究室の活動を中心に、都市の研究とデザインに関する情報やメッセージを発信する媒体を目指しています。



Picnic Interview P.10 - 13

Other Activities P.14 - 19

Karakuwa Workshop P.8 - 9

Civic Pride Conference P.6 - 7

Tokyo 2050 P.4 - 5

Jakarta Workshop P.2 - 3

## Jakarta Workshop

### Indonesia-Japan Joint Studio & Design Workshop 2011

2011年9月8日～9月18日、インドネシアのジャカルタにて、インドネシア大学、千葉大学、東京理科大学、東京大学の共同デザインワークショップが行われました。伊藤研究室からは大学院生3名、学部生4名が参加しました。ジャカルタ都市圏は現在人口2800万人を越え、将来は東京に匹敵するメガシティになると予測されています。インドネシアで伝統的な村落を意味する「カンボン」。本ワークショップではジャカルタ中心部に位置するチキニーというカンボンを対象としました。人口密度の高いジャカルタではカンボンが多くの人を受容しています。低層超高密度の都市内カンボンから、高層化とは異なる都市居住のサステナビリティを学び、環境に合った空間的提案をすることが本ワークショップの目的です。そこで、「建造環境」「自然環境」「ライフスタイル」のそれぞれの視点でデザイン提案をする3グループ、映像によって空間と情報を可視化する1グループを日本・インドネシア混成で構成し、フィールドサーヴェイから提案・プレゼンテーションまでを10日間で行いました。本ワークショップは、総合地球環境学研究所「メガシティが地球環境に及ぼすインパクト」プロジェクトの一環として行われました。研究室プロジェクトページURL: [http://www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/project\\_megacity\\_2011.html](http://www.rs.noda.tus.ac.jp/~i-lab/project_megacity_2011.html)



### Comments



M2 吉本 浩卓

カンボンの見所は「シェア」であると思います。アッパークラスの住宅地域とは違い、カンボンは上下水設備が整っておらず、洗い物をすするにも、用を足すにも MCK と呼ばれる公共水場まで歩いていくのです。建物は密集して通風の悪い住環境ですから、一家に一つ汲取式のトイレを設けると、そこは住むに耐えない状況となってしまいます。そのような条件下で生まれた MCK や生活スタイルがあり、生活排水で汚染された川は、住環境と自然環境のトレードの結果だったのだという発見がありました。そこをどう改善するかがポイントだと改めて思います。またシェアを通して生まれるコミュニケーションの取り方も注目すべきところだと思います。



B4 池田 俊介

私の班は他の設計班と違い最終成果物としてチキニーを題材とした動画を作成する班で厳しいスケジュールの中でなんとか動画を完成させようとかかなり大変な思いをしましたが、今振り返ると設計とは趣向の違った、動画作りという新しいことに挑戦することが出来る良いきっかけになったと思っています。また、それ以上に日本では決して感じる事ができないような独特の雰囲気のある場所を調査できたこと、インドネシア大学の学生達と一緒に作業して交流できたことは貴重な体験でした。ワークショップ前の日本でのジャカルタ勉強会を入れると4ヶ月以上という長い時間を費やした活動でしたが、それだけ得られるものが多く価値ある時間を過ごせました。

### Design



"PARKING TO PARK"



"FLOWING"

### Movie



"Cikini Stroll -Decompose Labyrinth-

### Process



Tokyo 2050  
//12 Visions For  
The Metropolis

東京2050 //12の都市ヴィジョン展



Exhibition

第24回世界建築会議(UIA 2011東京大会)に連動して、建築家や都市デザインを専攻とする首都圏12の大学の研究室チームが新たなメトロポリス像として、あるいは、成熟社会のアジアの大都市モデルとして、2050年における首都圏の未来像を提示する展覧会が行われました(2011年9月24日~10月2日、丸ビルホール)。  
伊藤研究室は、宇野研究室(本学工学部建築学科)、吉見俊哉教授(東京大学情報学環)とチームを組み、近代東京における第一世代の山の手と下町である本郷~不忍池~上野~浅草を対象地とし、歴史や地質など土地のもつ「自然」を読み取りながら「まだら」に構築される都市環境と、より広域な都市ネットワークのなかで中世のように移動する人々が訪れ、留まり、通過する都市社会を、「2050年の東京」の姿として構想しました。



Process



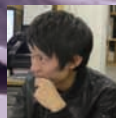
2011年1月から9月の展示までの期間、宇野先生や宇野研究室の学生メンバーなども議論を重ね、対象地のフィールドサーヴェイをし、また、吉見先生のインタビューを通して盛り場・都市ネットワーク・都市の「中世」化といった知見を取り入れながら、展覧会に向けた作業を進めていきました。  
宇野研究室は、この地区の歴史や地質の情報を読み取りながら、人工物と自然が摂理に逆らわない形で混合する都市環境を構想し、パネルと模型でその姿を表現しました。一方伊藤研究室は、「人と場所：一時間/一日/一生」をテーマに、フィールドワークによって人のアクティビティと物的環境との関係を観察し、インタビューによって移動の多い人生を送る人々の求める都市空間を探りました。3つの時間スケールで人の移動の考察を行い、中世のように移動をベースとした社会が想定される2050年の都市のあり方を、特に公共空間に着目して、パネルと映像で表現しました。

Comments



M2 兼森 毅

「東京を一つの巨大都市と捉えてはならない」これはいろんな人の東京についての考えを聴き、意見を交えていくうちに、私が強く感じたことです。新宿、渋谷、上野、秋葉原...実はこれらが都市でこの集まりが東京であり、それらを繋ぐ山手線は東京の骨格なのではないかと...自分の地元である東京について、宇野研の皆さんと、過去を読み、今を知り、未来を研究室の枠を超えて議論して、ヴィジョンを描いたこの経験はとても貴重なものになりました。



M1 小野田 龍

不忍池周辺での宇野・伊藤研究室合同によるフィールドワークから始まり、宇野研の地形、地盤、地質といった自然環境による下からのアプローチと、伊藤研による交流人口や人々のアクティビティといった上からのアプローチを互いに重ね、幾度も議論を交わしました。多くのメンバーで2050年の東京を思考すること自体が有意義であり、モノとして提案できたことで、40年後という不確かな背景のもとでもある種のヴィジョンを共有できたと感じました。

# シビックプライド会議

## シビックプライド会議

2011年10月9日(日)、東京理科大学森戸記念館において、シビックプライド研究会が主催する「シビックプライド会議」が開催されました。このシンポジウムでは、日本の諸地域で、シビックプライド(都市に対する愛着や自負)を醸成し、その場で生かすことができるようなデザインに関わるスピーカーを迎え、実践を紹介いただくとともに意見交換を行いました。基調講演では、「レジブルシティ・プリストル」等、ユーザー中心の都市空間と多様な交通に関わる情報のデザインの第一人者マイク・ローリンソン氏にデザインの視点からの講演を、「ファスト風土」批判などを通して地域性を活かした都市の豊かさを論じる三浦展氏に、日本の地域社会の視点からの講演をしていただきました。多様なアプローチによる体験が次々と紹介され様々な立場からも同様の興味を共有する、大変充実したシンポジウムとなりました。会場には定員を超える多くの参加者にお集まりいただき、Ustream中継でも全国から多くのアクセスがありました。2006年から続いているシビックプライド研究会の活動においても、新たなエポックを予感させる重要な機会となりました。



### Comment



MI 川上 那華

今回のシビックプライド会議を通して、都市のデザインとその発信の重要性、そしてそれが多くの人に共有されることの必要を強く感じました。発信のツールや形はそれぞれ個性的で面白かったですが、その重要性を熱く語って下さったというのが登壇者の皆様に共通して受けた印象です。さらに、その重要性をより多くの人に共有してもらおう方法を、今後社会に出ていく私たちが探していかなければいけないと思いました。また、この貴重な会のプロジェクトマネジメントをさせていただいたことで、会の終わりに学生ながら大きな達成感を感じることができました。

## プログラム

Keynote1 マイク・ローリンソン [デザイン・プランナー、City ID ディレクター]  
「イギリスにおけるシビックプライドを醸成する空間と情報のデザイン」

Keynote2 三浦展 [マーケティング・アナリスト、カルチャースタディーズ研究所 主宰]  
「日本における地域社会の崩壊とシビックプライド醸成の必要性」

Session1 アイデンティティをデリバリーする (モデレーター=紫牟田伸子)  
鈴木功 [タイプフェイスデザイナー、タイププロジェクト] 「都市フォントプロジェクト」  
迫一成 [デザイナー、ヒッコリースリートラベラス] 「新潟上古町、商店街のアイデンティティ」

Session2 都市情報をデリバリーする (モデレーター=田井中慎)  
渡辺保史 [北海道大学院地球環境科学研究院 上級コーディネーター] 「情報デザイン」  
韓亜由美 [アーバンスケープアーキテクト、Studio Han Design 代表] 「工事中景」

Session3 都市景観でデリバリーする (モデレーター=太田浩史)  
西村浩 [建築家、株式会社ワークヴィジョンズ 代表] 「まちの居場所」  
島津勝弘 [クリエイティブディレクター、島津環境グラフィックス 代表取締役] 「富山市LRT構想へのデザインサポート」

Session4 教育・ワークショップでデリバリーする (モデレーター=武田重昭)  
加藤文俊 [慶應義塾大学環境情報学部 教授] 「フィールドワーク&まちのメディア化」  
河田祥司 [香川大学教育学部付属高校小学校 教諭] 「初等教育における観光まちづくり教育」

Session5 行政の立場でデリバリーを編集する (モデレーター=伊藤香織)  
長谷部文子 [四国経済産業局広報・情報システム室 広報係長] 「四国経済産業局シビックプライド事業」  
椿辰一郎 [北九州市役所職員] 「門司港レトロが紡ぐ地域ブランド」

## Talk session

### シビックプライド研究会

都市計画、建築、コミュニケーション、ランドスケープ、アートなど産学の多彩な分野のメンバーが集まり、シビックプライドとコミュニケーションデザインについて、先進事例調査、議論、文献講読等の研究活動を2006年から行い、自治体等への提案と調査を手がける。欧州事例調査と論考を中心とした成果は「シビックプライド:都市のコミュニケーションをデザインする」(宣伝会議刊、2008年)としてまとめられた。伊藤研究室は、研究会発足当時から歴代の大学院生が研究会の運営に携わっている。

## Karakuwa Workshop

### 唐桑ワークショップ

東日本大震災直後から被災地を巡り支援を続けていた建築家佐藤敏宏氏の主導のもと、宮城県気仙沼市唐桑町鮎立(しびたち)で、復興支援のワークショップを7月と8月に4日間ずつ行いました。伊藤研究室の他に、東京大学、芝浦工業大学の研究室などが参加しました。



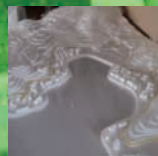
### about Shibitachi, Karakuwa



気仙沼中心市街から車で20分程度、唐桑半島の南側で大島と向かい合う鮎立は、牡蠣の養殖が盛んな漁村集落です。複雑に囲まれた穏やかな湾と、斜面に並ぶ石垣と家並みが美しい景観を形成しています。震災では深刻な津波の被害を受けました。

### Activities

ワークショップでは、日中は主に蔵や集落地形の測量を行ったり、歴史や漁業に関するレクチャーを受け、夜は地元の方々を招いて地震当日の様子や震災以前の鮎立の産業や生活などについてざっくばらんにお話を伺う会を重ねていきました。会の中で、集落内の津波到達範囲を詳細に知りたいという要望があったため、翌日にはその方と一緒に集落を歩き調査をして、浸水マップと模型を作成しました。8月ワークショップの最終日には、地元の方々に聞かせていただいたお話をまとめて、模型とともに展示しました。ワークショップ終了後には、一旦、参加学生の感想を冊子にして、地区内の全世帯に配るなど、交流を続けています。今後は、復興に向けた具体的な協力をしていきたいと考えています。



### Comments



M1 石橋 理志

都市計画・都市デザイン研究室の学生として、被災地でなにか手伝える機会はないかと探していた矢先に佐藤さんからこのワークショップの話があったので2回とも参加しました。現地の方々に当日の話や唐桑の歴史、漁師の生活、それを支える奥さんの生活など直接聞けたことがとてもよい経験になりました。まだまだワークショップは続けるようなので、今後も参加し、継続的に唐桑に関わっていきたいと思います。



B4 上原 慧史

佐藤敏宏さんをはじめ、地元の方々・東大生・他大学の講師の方々など様々な分野の人からとても興味深い話を聞ける良い会でした。たくさんの方の話を聞いて少しだけでも当時の様子がわかってきたように思います。これからこのワークショップを続けていくことはもちろんのこと、常に地元の人たちとの繋がりを維持続けることが1番大切なことなのだと感じています。

## picnic interview

今回のピクニック・インタビューには、写真家の鈴木豊氏をお招きし、武蔵野台地を一望する桜ヶ丘公園ゆうひの丘でピクニックをしながらお話を伺いました。今回は、鈴木さんの秘密道具でピクニックの鳥瞰写真も撮っていただきました。ゆうひの丘からの眺めがよくわかります。



## picnic interview



guest: 鈴木 豊氏

写真家。ライター通信社、PPS通信社など勤務後、1986年より写真家として独立。光の美しさを追い求め、アントニオ・ガウディ、オーロラ、チェコのガラス作家スタニスラフ・リベンスキー、キュビズム建築などを撮影してきている。雑誌『アクシス』では「匠のかたち」を16年にわたって連載。東京ピクニッククラブメンバー。

どのようなきっかけで写真家の道を志したのですか？

世界各国で「A Day in the Life」シリーズの写真集が出ているのですが、「A Day in the Life of Japan (日本の24時間)」の企画を、1985年にコダクローム50周年記念事業に持ち込んだのがきっかけです。企画は採用され、このプロジェクトのために世界の写真家100人を集めることができました。日本人が25人、海外の写真家が75人です。そこで目の当たりにしたのは、日本の写真家と海外の写真家との意識の違い。世界で活躍している人は、常に人の話の中に入っていき、そういうことがすごく楽しいと言うんです。語学の問題ではなく、意識が違ってました。それを見て、これは写真家にならなきゃいけない、と思ったんです。知り合いのニューヨークの写真家は「写真家はソーシャル・コミュニケーション・ワーカー」だと言う。撮るのが上手いとか下手とかいうより、人との関係性とかそういうことでほとんど決まってしまうんです。私が、ガウディの写真を撮りにいく時もそうでした。ガウディの住宅作品には世界中から多くの人々が訪れますから、私が行くくと住人は「また来たの」という感じになる。その日は入り口で写真を撮らせてもらい、次にその写真をもって行くとなら中まで入れてもらえるようになり、最後は自由に撮影させてもらいながら留守番まで任せられるようになりました(笑)。そこで写真を撮るたくさん撮りますね。写真を見せてあげると、住んでいる人でさえ新たな発見をすることがあります。写真は誰でも行けば撮れるけど、自分の写真にするにはそういうものの関係を積み上げていく必要がある。



秘密道具で鳥瞰写真を撮影する鈴木さん



フォトピカ\*の撮影手法は難しそうな印象がありますが。

一つの商品(少しずつ角度を変えながら36フレームの撮影で一つの商品になる)を2分間くらいで撮らないと、室内の像が崩れてくるように感じます。古代ギリシアで使われていたスタディオンという単位があって、これはスタジアムの語源にもなっている言葉です。太陽が沈み出すと同時に歩き始め完全に沈み切るまでに歩いた距離のことです。1スタディオンはアテネだと178m、オリュンピアだと192.27mという風に都市ごとに異なります。この1スタディオンに対応する時間が2分くらいで、これが「現在」のひとつの単位のような気がするのです。日本語にはありませんが「現在形」が有効な時間幅と言い換えてもいいかもしれません。屋外はもちろんなこと、室内でもこれ以上ゆっくり撮影していると、どこか違和感を感じる写真になります。

\*フォトピカ：両眼視野に相当する画角を6列6行35mmフィルム一本に収める撮影方法。見る者を包み込むようなアントニオ・ガウディの空間を表現するために、鈴木氏が行き着いた方法。「立体写真」の意。

今の学生へのメッセージをいただけますか。

若い人に言えるとしたら、「何かに挑戦する場合、いっぺんに高い所からやると良い」ということ。最初に核心にアプローチするんです。アメリカの写真雑誌の編集者から「競争が激しい所で一番下からやっても上までは辿りつかない」と言われました。それを心がけることで、私は皆が羨むような写真家のアシスタントもしました。それはスキルがあるとかではなく、情熱があればできると思います。怖いもの知らずみたいなの(笑)。今でも、私はそうしています。写真集を出したいと思ったときも、自分が思う核心の出版社に最初に持っていく、そこから出版できることになりました。とにかく、情熱が一番大切なんです。

ピクニック・インタビューは、ゲストと一緒に食事やお酒を楽しみながら、寛いだ雰囲気の中でお話を聞かせていただく場です。同時に、場所・風景選びから料理の選択までをトータルにデザインする都市デザインのトレーニングにもなっています。



site: 桜ヶ丘公園(多摩市)  
date: 2011年11月12日

伊藤研究室に助教の先生がやってきました!

伊藤研究室の印象は?

2011年4月に着任しました。丹羽由佳理です。伊藤研究室の皆さんは、それぞれに個性が強くて、建築・都市デザインに対して元気よく取り組んでいるのが印象的です。4月当初は、学生数の多さにはとても驚きましたが、これほどの学生を指導している伊藤先生のスゴさを実感。新任の私にアドバイスをくれる学生もいて、大変助けてもらっています。ありがとうございます。7月からは産休をいただいておりますが、産休前に皆さんから頂いた色紙には感動しました(特に、掘口くんが描いてくれた似顔絵は、気に入ってます!)

名前:丹羽 由佳理 (にわゆかり)

経歴:2007年 東京大学大学院博士課程満期終了、博士(環境学)。2007~2010年 柏の葉アーバンデザインセンターディレクター。2010~2011年 早稲田大学人間科学学術院助手。2011年4月より東京理科大学助教。日本建築学会優秀修士論文賞(2004)。アーバンデザイン研究体アーバンデザイン特別賞「柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK)」受賞(2010)。

専門:都市デザイン、建築設計及び計画

## ピクノポリス大阪

大阪の中之島で開催された水都大阪フェスで東京ピクニッククラブに協力し、出展作品の制作をしました。ピクニックのできる移動式芝生「モバイル中之島」がフェス会場を巡り、上空に浮いた雲形カメラからピクニックをしている方々を記念撮影しました。



M1 小野田 龍

今回、実施のアートイベントに東京ピクニッククラブへの協力という形で参加することで、デザインを仕事とすること、実現させることの難しさと達成感を同時に味わう貴重な経験となりました。プロジェクトに関わった期間は1か月弱と短い期間でしたが、町工場の人々、イベント関係者各位、多くの助けを必要としながらもゼロから物事をつくり出す過程は刺激的で、クリエイティブな大阪出張の日々でした。



M1 古川 正敏

短い制作期間であったのがなにより印象的。普段の研究室活動を飛び出し、大阪で2週間泊まり込み、自分たちのデザインしたものをどう形にしていって、職人さんたちとの熱い打ち合わせは連日続いた。設計したものが実際に出来上がり、多くの人に使われている様子に感動であった。ひとつのプロジェクトを完成させるには、時間と多くの人々の力が必要なのだ改めて感じた。大阪という土地柄もあるせいか、会おう大人たちが皆気さくで、毎日楽しかった。

## アーキエイド サマーキャンプ

3.11の震災による津波の被害を受けた宮城県牡鹿半島の30の浜を15の建築家+学生チームが調査を行い現地住民と共に復興計画案を作成する活動で、安原研+SALHAUSチームの一員として、牡鹿半島沖の離島である網地島の2つの浜を担当しました。



M1 大久 保遼一

台風で船が欠航したりしながらもなんとか網地島を訪れた今回の調査。津波の被害にも負けず毅然と生活する人々と島の豊かさに心を打たれながら必死に調査し提案をまとめました。最初は相手にしてくれなかった島の区長さんも私たちが熱意を持って接することで協力してくださり、島の方々への発表では本音も交えた意見を頂きました。普段の学生生活では決して得ることのできないリアリティを伴った貴重な経験をすることができました。



M1 鎌田 健太郎

3.11から約4ヶ月後、私たちはサマーキャンプに参加させていただきました。プロジェクトとは別で何か所かの現地の様子を見たとき、多くの建築が基礎から根こそぎ崩壊している状況が視界に入った時、建築の弱さというのを考えさせられました。一方自分たちが担当した網地島は本島と比べ物理的被害は少ないものの、市場の卸し先の確保、船の運航など本島との見えないネットワークの崩壊による被害が目立ち、震災復興にはネットワークというものが震災復興の大きな鍵ではないのかと個人的に思われました。



谷知子・伊藤香織 (2011),  
「町家に対する価値意識と保存再生手法の評価に関する研究：奈良町を対象として」,  
都市計画論文集, no.46-3, pp.223-228.

本研究は、奈良町に残る伝統的町家に対する価値意識と保存再生手法の評価を推計し明確化することを目的とする。奈良町の居住者や店舗経営者のような奈良町生活者と奈良町への来訪者に対して、町家の各価値要素と保存再生手法の比較をそれぞれ行い、さらに仮想的な質問をして、奈良町の現状を踏まえた上で町家の保存再生に向けた寄付金への支払志願を尋ねる調査を行った。その調査結果をもとに、CVMを用いて町家の評価を定量的に推計し、AHPを用いて奈良町町家に対する価値構成と保存再生手法の評価を明らかにした。訪問者と同様に属性の異なる市民グループ間の比較を行った。その結果、(1)奈良町町家に対する評価は、京都や金沢の研究事例に比べ低く捉えられている(2)文化的価値の認識が支払動機につながると考えられる(3)文化的価値を重視すると考えられる保存再生手法はあがるが、奈良町生活者は外壁のみ町家を保持し内部は現代風に再生する手法を最も重視していることが明らかとなった。



M1 古川 正敏

「ちかい家」



外を歩くときの、ありのままの光の美しさやあたたかさ、風の吹きぬげる匂いを感じることができそうな家を創りたいと考えました。この家は外部空間のような内部空間です。屋根も壁もなく、外にいるような清々しい気持ちになれる家です。「ちかい家」は外との距離のちかい家。そして家族との距離のちかい家になります。家族が生活するための場を地下に創ります。それぞれの機能を、光の入る時間と調整しながら配置していきます。例えば寝室なら朝日がたくさん入ってくる場所に配置します。そして機能ごとに違う性格をもった光をトップライトから落とします。グランドレベルでは、住宅街の中で風の抜ける通り道となります。子ども達が遊び、お父さんが日曜大工をする、大きな箱につつまれた原っぱのような空間が広がっています。風とともに家族が過ごせるような空間です。

2010 年度日本都市計画学会年間優秀論文賞受賞

佐野由有・伊藤香織 (2010),  
「経路探索行動からみる都市空間把握の文化的差異：地理情報媒体に着目した実証分析」,  
都市計画論文集, no.45-3, pp.427-432.

受賞理由：本論文は、外国人観光客の誘致や国際競争力のある観光地づくりに寄与する情報提供方法を検討したものである。外国人観光客に随行し、確信度の高い情報内容の種類と情報収集のタイミングなど詳細な調査によって、以下の有用な知見を得ている点が評価できる。(1)外国人は移動途中で日本人以上に経路案内文を重視していること、日本で提供される地図では、描かれている道路相互が交わる角度や幅員差を実空間と照合することが、外国人には難しいことが明らかにされた。(2)移動時における現在位置の確認は、日本人のように左右折する交差点だけでなく、交差点を直進する途中においても確認を行っているため、標識などの情報板の設置位置は、交差点を左右折直進による通過中のいずれの場合も確認可能となるように考慮する必要があることが明らかにされた。以上の成果により、国際競争力のある観光地づくりや地域の活性化に貢献できる研究として評価できる。

研究発表

「ファサードが形成する都市空間のイメージ：ファサードマップを用いた経路探索実験を通して」

小野田龍, 伊藤香織 (2011), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.87-88.

「場所認識の構造化：東京を俯瞰する」

石橋理志, 伊藤香織 (2011), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.219-220.

「鉄道駅における都市情報の発信：活動主体の役割と関係性に着目して」

川上那華, 伊藤香織 (2011), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.625-626.

「利用者行動と沿線空間から見るサイクリトレイン：上毛線の事例」

伊藤慎吾, 伊藤香織 (2011), 日本建築学会学術講演梗概集, F-1 分冊, pp.707-708.

「利用者行動と沿線空間から見るサイクリトレイン：上毛線の事例」

伊藤慎吾, 伊藤香織 (2011), CSIS DAYS 2011 空間情報科学研究センター シンポジウム

## 卒業論文

2010年度(通年)

場所認識の構造化

—東京を俯瞰する—

相澤伶美・石橋理志・大澤郁美・山口真理香  
(2010年度 卒業論文賞2位)

利用者行動と都市空間から見る日本のサイクルトレイン

—上毛線の事例—

伊藤慎吾・香川瞳・高田三輝・三輪南美子

2011年度(半期)

都市の公共空間における人々の集まり方

—実測調査に基づく集合の類型化—

上原慧史・大木美穂・佐藤祐理・堀口裕

来街者はいかに再開発地域を認識するか

—写真を用いた認識要素の実験と分析—

邱智エン・田中瑠璃・永井智裕

街路網構成と商業施設分布による中心市街地の比較分析  
星洗祐・山本浩平

## 卒業設計

2010年度

商店街の道と部屋  
岡田早由里

727→728島人の小学校はせとうちを漂う  
小野田龍

がらくたのみち  
川上那華

海の浴室  
近藤秀彦

NEO TOKYO ~NAKANOPROJECT~  
中川俊太郎

Fading Voids  
宮川卓也

## 修士論文

2010年度

東京下町における商店街の存続要因に関する考察  
-葛飾区を対象として-  
川喜田渉

広告付きバス停留所の景観向上効果に関する研究  
鈴木志帆

ムスリムの礼拝空間モスクの日本における形成過程  
高橋祐二

町家の有する価値と保存再生手法に関する研究  
-奈良町を対象として-  
谷知子

東京郊外の空き家分布からみる都市縮小の現状と課題  
-埼玉県の戸建住宅地を対象として-  
益子岳貴



街のなかのみんなの場所-北区役所建て替え計画-



余白



## 修士設計

2010年度

街のなかのみんなの場所  
-北区役所建て替え計画-  
中口裕太

余白  
船瀬瞳